

# D.J. Bapt. Pallegoix: Grammatica Linguae Thai (1850) について

石 井 米 雄

1855年4月、イギリスと友好通商条約を締結することによって欧米資本主義勢力に自由貿易の門を開き、その結果シャム（現在のタイ国）に近代をもたらす契機をつくる決断を下したシャム王モンクットの治績については、今日歴史学者の間で、ほゞ一定の評価が与えられている。<sup>①</sup> しかしそのモンクットにとって、おそらくは最初の西洋文化の紹介者の役割を果たしたPallegoixの業績とその意義については、ほとんど見るべき研究がない。

Denis Jean Baptiste Pallegoix は、1805年、Côte d'or のブドウ園で知られるBeaune 近傍のChambertault で生れた。若くして僧職者の道を志したPallegoix は、1830年、25才のとき、宣教師としてシャムに派遣された。首都バンコクに到着したPallegoix は、布教活動の開始に先立ち、まずタイ語の学習を始めている。当時はまだタイ語辞書もなく、初学者の手がかりと言え、イギリス人 Captain James Low が、現地を知らないという不利を克服して、2年前にカルカッタで出版した不備な文法書1冊があるに過ぎなかった。<sup>②</sup>

バンコクでタイ語の習得に数カ月を送ったPallegoix は、63年前、ビルマ軍の攻撃を受けて滅亡した旧都アユタヤに赴き、かつてこの地に栄えた東南アジア最古の教会L'Eglise Saint-Joseph の廃墟に小会堂を建設して、住民の間に伝道を開始した。1838年、布教活動進展の結果、シャム代牧区が、本来のシャム代牧区と、タヴォイ、メルギ、ペナン、シンガポール、マラッカを管掌するマレー代牧区(Vicariat de la Malaisie)に分割されると、Pallegoix はマロス司教(Evêque de Mallos)に聖別され、シャム王国代牧(vicaire apostolique du royaume de Siam proprement dit)に任命された。

そのころ、バンコクにあるポーウォンニウェート寺(Wat Bōwonnīwēt)には、のちにシャム国王となるモンクット親王が1824年以来出家して住職をつとめていたがPallegoix はこの開明的な王族僧侶と親交を結び、親王からパーリ語の手ほどきを受けるかたわら、これにラテン語を教授した。後年国王となったモンクットが、好んで Rex Siamensium というラテン語のタイトルを用いたのは、この時の交換教授のなごりと考えられている。

Pallegoix は、こうして上は王族から下は下層民にいたるまで、当時のシャム社会の各層の人々と広く交り、32年を伝道生活に捧げたのち、1862年、任地バンコクで57年の生涯を閉じた。

Pallegoix は、その生涯のうちに、つぎの4種の著作を発表している。

(1) Grammatica Linguae Thai. Bangkok, 1850.

(2) Dictionarium Latinum Thai ad usum Missionis Siamensis.

Bangkok, 1850.

(3) Dictionarium Linguae Thai sive Siamensis interpretatione Latina, Gallica et Anglica illustratum. Paris, 1854.

(4) Description du Royaume Thai ou Siam. 2 tomes. Paris, 1854.

このうち(2)は未見であるが、残りの3点の業績は、そのいずれをとってみても20年にわたる豊富な現地体験に裏付けられた著者の学殖が随所に見られるすぐれた著作である。世に Pallegoix の著作として最も多く引用されるのは(4)の Description 全2巻であろう。かれの滞在中シャムを訪れ、イギリス全権として条約締結に活躍した香港総督 Sir John Bowring は、これもまたしばしば言及されるかれの The Kingdom and People of Siam; with a Narrative of the Mission to that Country in 1855. 2 vols. (London: 1857)のなかでつぎのように述べ、自著が Pallegoix の Description に多くを負っている事実を明らかにしている。

'The Author cannot omit this opportunity of returning his thanks to Bishop Pallegoix, for the permission kindly given by him to make use of the contents of his interesting work (published in 1854) entitled Description du Royaume Thai ou Siam. He has not failed to take advantage of this permission to a considerable extent...'<sup>(4)</sup>

また(3)の Dictionarium は、完成後、モンクットに贈呈した事実が報告されており、著者死後、ラテン語の部分を除いて刊行された普及版 Dictionnaire Siamois-Français-Anglais. (Bangkok: 1896) は、近年にいたるまでタイ語研究者の間でひろく利用されていた。

これに対して(1)の Grammatica は、ラテン語で書かれたことや、その表題の与える印象から一部の言語学者をのぞくと、ほとんど無視され続けたまゝ今日に至っている。

しかしこの書物は、Grammatica とは言うもののその内容は「文法書」の通念を越えてはるかに広く、歴史、仏教など、当時のシャム事情に関心を寄せる研究者にとって数多くの有益な資料を提供してくれる。しかも Grammatica を Description と比較するならば、後者はしばしば前者の逐語訳に過ぎないことを知るのである。さらに Grammatica の特長は、Description ではフランス語訳が得られるに過ぎないタイ語資料の原文が、タイ文字のまま収録されている点であって、その中には「負債奴隷売買契約書」など、他には求めることの出来ない貴重な同時代史料が含まれている。Pallegoix 研究は、今後進展を見ることが期待されるが、本稿では、かれの著作の中で、これまで不当に看過されて来た Grammatica の内容を紹介することによって、今後の研究の足がかりとしようと思う。なおテキストには東洋文庫所蔵本を利用した。

Grammatica は4つ折本で241頁、扉には

GRAMMATICA LINGUAE THAI, AUCTORE D. J. BAPT. PALLEGOIX, EPISCOPO MALLENSI VICARIO APOSTOLICO SIAMENSI. Ex typographiâ collegii Assumptionis B.M.V. in civitate regiâ Krung Thèph mahá nakhon sí Ajüthája, vulgò BANGKOK. ANNO DOMINI 1850.

の文字が見える。

これから印刷はバンコクにある Collège d'Assomption 印刷所で行われたことが知られるが、別の資料には、タイ語の植字を、シャムに初めてタイ語活字印刷の技術をもたらした米国バプテスト伝道部の J.H. Chandler が担当し、Pallegoix 自身が印刷全版にわたって、親しく指揮監督を行なったとあり、<sup>(5)</sup> そのためか誤植はきわめて少い。

Grammatica はつぎの30章より成る。

Caput I De origine, nomine naturâ et compositione linguae Thâi.

Caput II	De litteris linguae Thăi, per classes dispositis.
Caput III	De sono litterarum et alphabetico litterarum contextu.
Caput IV	De accentibus et signis linguae Thăi.
Caput V	De tonis linguae Thăi
Caput VI	De nominibus.
Caput VII	De adjectivis.
Caput VIII	De numer cardinalibus et ordinalibus.
Caput IX	De pronomibus.
Caput X	De verbis.
Caput XI	De adverbis.
Caput XII	De praepositionibus, conjunctionibus et interjectionibus.
Caput XIII	De praefixis.
Caput XIV	De numeralibus.
Caput XV	De paribus.
Caput XVI	De syntaxi linguae Thăi.
Caput XVII	De idiotismis.
Caput XVIII	De titulis et stylo conversationis.
Caput. XIX	De Specimina prosae linguae Thăi.
Caput. XX	De Dialogi seu colloquia inter varias personas.
Caput. XXI	De divisione temporis, ponderibus, mensuris etc.
Caput. XXII	De prosodiâ et carminibus linguae Thăi.
Caput. XXIII	De orthographiâ.
Caput. XXIV	Săpphănăm.
Caput. XXV	Răxăsăb.
Caput. XXVI	Chronologia regni Siam.
Caput. XXVII	Catalogus praecipuarum urbium regni Siam.
Caput. XXVIII	Catalogus praecipuorum librorum linguae Thăi.
Caput. XXIX	Catalogus librorum sacrorum sectae Buddharum.
Caput. XXX	Systema Buddhisum secundum Siamenses.

このうち、狭義の文法書に属する部分は第1章から第18章までと、第23章から第25章に至る3章の計21章で、これに会話文、散文、韻文の見本例をおさめた第19・20・21の3章が続く。これらはページ数にして全体の約62%にあたる。残りの38%は、歴史、地理、宗教、文献目録等々で、〈文法〉とは無縁の内容である。

さて Pallegoix は、本書の冒頭にタイ語で Chindāmanī と書き、その下に Grammatica Linguae Thai という表題を置いている。これは Chindāmanī すなわち「タイ語文法」という意味であろう。Chindāmanī は、サンスクリットないしパーリ語の Cintāmanī に由来するタイ語で、その原義は「如意宝珠」、つまり「その所有者の抱く一切の願望を成就させる霊力をもった空想上の宝石」の意であるが、<sup>⑥</sup> シャムでは、17世紀末に書かれた伝統的タイ語文典につけられた書名を指すのが普通である。17世紀の中葉以降、首都アユタヤにセミナーを建設したフランス人宣教師たちは、さかんに宗教教育活動を行なったが、時のシャム国王プラナライ(1657~1688)は、外国人のこうした動きに対抗するため、Phra

Hörōthibodīに命じて文典を編さんせしめ、タイ人子女の國語教育の用に供せしめたのが Chindāmanī であるという。<sup>⑦</sup> Pallegoix自身は、第1章の脚注の中で、この書を「文法および作詩規則書」(opus complectens regulas grammaticae et prosodiae)と規定するとともに、Chindāmanīは広義では(sensu lato)「言葉を話しかつ書くための術」(ars dicendi et scribendi)に外ならないとしている。Grammaticaの内容を精査すると、Pallegoixがタイ語文法を記述するにあたり、依拠したのが、ラテン文法とともにこのChindāmanīであったことが知られる。

第1章の〈タイ語の起原〉においてPallegoixは、アッサムの近くに住むカムティ族(una natio nomine Kōmti)の言語とタイ語との間に大きな親縁関係が認められる事実を指摘している。(cujus lingua maximam habet affinitatem cum lingua thāi.) 当時すでにヨーロッパの学界では、カムティ語とシャム語(タイ語)の親縁性が話題となっており、1837年にはNathan Brownによって、両言語の比較語彙がJournal of Asiatic Society of Bengal誌上に発表されているが、<sup>⑧</sup> Pallegoixはこうした学界の新しい動きにも注意を払っていたことがうかがわれる。

Pallegoixは、シャムの言語については全篇を通じて「タイ語」(lingua thāi)という呼称を用いているが、国名についてはregnum Siam、民族名についてはSiamensesを一貫して使用している。「シャム」か「タイ」という議論は近年に至るまで行なわれているところであるが、以下の議論は、すでに19世紀中葉においてこの問題が意識されていたことを示して興味深い。

「かつては〈シャム語〉(lingua Siamensium)と呼ばれ、現在でもsājāma phasāsuna wachi〈シャム語〉と呼ばれている。"sājāma"はサンスクリット語の"syama"(褐色のsubfuscus)に由来し、この語がシャム王国およびシャム人の真実にして本来の呼称(verum et proprium nomen)であることは疑いを容れない。後年、おそらくは仏暦1000年に、カンボジアの支配を打ち破ったプララン王の時代に、シャム人が〈自由な〉(liber)を意味する"thāi"という名称を用いるようになり、その言語をphasā thāi suna wachi〈自由人の言葉〉(lingua librorum)呼んだのである。」(p.1)

第2章は「文字論」である。ここではタイ語の母音および子音文字の解説が行なわれる。興味をひかれるのは、44語の子音文字を、それぞれの調音位置にしたがい、喉音、口蓋音、そり舌音、歯音、唇音、半母音・歯擦音・氣息音の6類に分類した上で、これをさらに〈高子音字〉(litterae altae)、〈中子音字〉(litterae mediae)、〈低子音字〉(litterae infimae)の三系列に整理している点である。前者は伝統的なパーリ語文法乃至サンスクリット文法の慣行にならったものであり、後者はタイ語に則した分類法でChindāmanīの中にその原型を見ることが出来る。タイ語はサンスクリットの3個の歯擦音 /ś/, /ṣ/, /s/ にそれぞれ対応する3個の文字を持っているが、タイ語におけるその音価はいずれも /s/ であるため、「正しく書く術」としてのChindāmanīでは、それぞれの文字を含む単語を集め、これを記憶し易いよう詩型に配列しているが、本書には、これがそのまゝの形で収録されている。

第3章は3節に分れ、その第1節では、ヨーロッパ諸語と比較しながら、タイ語の母音および子音素の解説が行なわれる。筆者の母国語であるフランス語のほか、ラテン語(/a/, /a:/, /i/, /i:/, /e:/ など)や英語(/tʃ/)も援用されている。音素の記述に対するPallegoixの姿勢は当時としてはかなり厳密で、たとえば無声無氣の口蓋音 /tʃ/ につい

ては、「ヨーロッパの文字をもってしては書き表わすこと不可能、止むを得ず chと書く」として表記の精密度の限界を明らかにしている。

De alphabetico litterarum contextu と題する第2節では、子音文字と母音文字の組合せによってつくられる単音節が、9群に整理され、網羅的に掲載されている。たゞその配列の順序が、CV, CVn, CVp, CVk, CVŋ, CVt, CVm, CVv, CwV... となっているのは、後に辞書にも採用されるようになった Chindāmanī の配列順 CV, CVk, CVŋ, CVt, CVn, CVp, CVm, CVv... と異なっているがこれは何故であるうか。その理由はわからない。ちなみに Pallegoix はかれの Dictionarium でもこの Chindāmanī の音節配列を採用せず、アルファベット配列によっている。

第3節では、高子音、中子音、低子音をそれぞれ音節の初めにもつ開音節の声調がとりあげられている。この中には外来語とくに中国語の諸方言の声調を示すために導入されたと言われ、本来のタイ語に欠けている「中子音+第3符号(mai trī) および中子音+第4符号(mai cattawā)」の組合せが含まれているがこれは当時すでにこの綴字法が普及していたことを示すものと言えよう。

母音記号、声調符号、その他について簡単な説明を加えた第4章につづく第5章では、タイ語の5声調が楽譜を用いて解説される。5つの声調にはそれぞれ tonus rectus, tonus circumflexus, tonus dimissus, tonus gravis, tonus altus という名称が与えられているが、この命名法は、Alexander de Rhodes が Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum の中で用いた声調呼称を想起させる。<sup>⑨</sup>

Pallegoix はタイ語母音のローマ字表記においても ǒ, ǔ など、一部に De Rhodes の表記法を取り入れていることから想像するに、かれは同じく声調言語であるベトナム語研究の先覚者 De Rhodes の業績を学んでいたものと思われる。

第6章の「名詞論」における Pallegoix の姿勢は、まさにラテン文法家そのものである。ここでは、性、数、格による語尾変化を欠くタイ語が、これらの文法範疇を表示するためにどのような手段を用いているかについて述べている。

第7章は「形容詞論」である。形容詞は単純形容詞 (adjectiva simplicia: "dī" よい, "chua" 悪い, など) と、中国語の「可愛」に見られるような動詞的形容詞 (adjectiva verbalis: "thī rak" 愛すべき, "nā klua" おそるべき, など) の2種に分けられ、比較級、最上級は形態的・変化によってではなく、補助語 (voces auxiliares) の添加によって示されるとしている。

第8章の数詞論では、基数および序数のそれぞれについて、本来のタイ語 (nung, sōng ...; thī nung, thī sō.g..) パーリ語からの借用形 (ēk, thō...; pathama, thutiya ...) というふたつの表現法が存在し、状況による使い分けの行なわれている事実を指摘する。

第9章の代名詞論でも、ラテン文法の範疇を用いて、それぞれ人称代名詞 (pronomina personalia), 指示代名詞 (pronomina demonstrativa), 所有代名詞 (pronomina possessiva), 関係代名詞 (pronomina relativa), 疑問代名詞 (pronomina interrogativa) の解説が行なわれる。そのためタイ語にはない「所有代名詞」の説明では、「人称代名詞の前に "khōng" を付して〔所有の觀念を〕表現する」とするなど無理が目立つ。

同様の姿勢は第10章の「動詞論」においますます顕著に現われる。すなわち、タイ語

動詞は語尾屈折を行わず、したがって数、人称、時制、法〔による屈折語尾〕をもたない (Verba sunt indeclinabilia, ac consequenter neque numeros, neque personas, tempora aut modos habent.) とし、(p. 47) これらはすべて文脈によって判断されるか (ex contextu subintelliguntur) あるいは補助語の添加によって表現される (per adjunctas voces exprimuntur) と結論する。そしてラテン文法そのまゝに、能動相、受動相のそれぞれについて「動詞活用表」(synopsis conjugationis verbi activi/ passivi) を掲載している。ここで興味をひかれるのは、受動相の説明に際し、タイ語では一般に受動相を用いることがきわめて少ないこと (paucissima sunt verba passiva) を指摘するとともに、受動相が動詞 "tɔŋg" を主動詞の前に置いて表現されるとしている点である。これは後世の文法書が、「動詞 "thūk" + 主動詞」をもって受身とするのと異っている。このことは受身表現の補助動詞としての "thūk" の使用が、きわめて新しいことを示している。この章では、また、主動詞の後について、動作の意味を限定する機能をもつ「副動詞」(verba auxiliaria) のうち、頻用される9個について例文をあげて説明を加えている。

第11章では、副詞が、「時」、「場所」など10のカテゴリーに分類される。また第12章では、前置詞、接続詞、感嘆詞の用例が、ラテン語訳を付して掲げられている。

第13章は「前綴論」(De praefixis) と題されているが、その内容は著者自身も指摘しているように、パーリ語、サンスクリット語からの借用語の意味を説明するためのものである。

さてタイ語には、日本語、中国語の一匹、一本などに見られるような数多くの「類別詞」があるが、Pallegoix はヨーロッパ語には見られないこの文法範疇に大きな関心を示した模様で、第14章に、むしろ「動詞論」以上のページ数 (pp. 60~66) をさいてこれを論じている。

第17章は「複合語論」である。単音節を基本とするタイ語は、しばしば2語の組合せによってひとつの概念を示そうとする。Pallegoix はこの種の複合語を paria と呼び、これをつぎの5つのカテゴリーに分けている。

すなわち：

- (1) paria euphonia (音調をととのえるため無意味の音節を添えた複合語) : 例 "yuk-yā" = "yā" 葉
- (2) paria iterativa (同じ意味をもつ語を並置してひとつの概念を示す複合語) : 例 "hon thāng" 道, "hon" も "thāng" 「道」の意。
- (3) paria enumerativa (同種類の物や行為を示す語を並置してつくる複合語) 例. "rai-nā" "rai" は陸田を含む畑地, "nā" は水田, あわせて「田畑」。
- (4) paria intensiva (類似の意味をもつ語を並置して意義を強調させる複合語) 例 "kao-kae" 古い。= kao" は「古い」, = kae" は「年老いた」。
- (5) paria imitativa (疑声語、疑態語) 例. "kuk-kak" 「ちよこちよこ」

第16章と第17章は、統辞論である。第16章ではまずタイ語には曲用、活用がないので統辞法はラテン語ほど厳密ではない、と前置きした上で、それぞれ、「名詞」、「形容詞」、「代名詞」、「動詞」、「副詞」、「前置詞」、「接続詞」の用法 (syntaxis) の原則を解説している。そして第17章では、慣用的語法を豊富な事例を用いて説明する。

第18章は、伝統的タイ社会の複雑さの指標である各種のタイトルについて述べた第1節と、

このタイトルの使用法を示した会話例を含む第2節とに分れる。本書に収録された100あまりのタイトルは、1850年当時の状況を示す資料として貴重であるばかりでなく、各タイトルに付されたラテン語訳は、現在では不明となっている伝統的官職の内容を知るひとつの手がかりとして有用である。

第19篇に収録された12篇の散文例もまた、単なる例文の域を起えた史料的価値をもつものである。以下にその内容に簡単に触れておきたい。第1篇には「森に入るときは山刀を忘れるな」などの俗諺を集めている。第2篇は貧欲をいませめた説話(niyāi)の例。第3篇は解熱剤の処方箋である。第4篇は"dīkā"として知られる国王への「直訴状」の例で、借金を完済したにもかかわらず証文の返却を受けられなかった某が、貸主から二重返済を迫られ、国王に対し救済を求めるという内容である。第5篇は「訴状」(scriptum accusationis)で、50頭の牛を所有する某が、15人の盗賊に押入れられ、牛を奪われたが、その中に以前面識ある男がいたので、これを捕えて詮議して欲しいというのがその趣旨である。第6篇は「借金証文」で、いわゆる「利子払奴隷」となる契約の一例として珍らしい資料である。第7篇は、娘を「奴隷」として売る「契約書」(chirographum venditionis filiae)で、『三印法典』(1805)<sup>⑩</sup>の「奴隷法」に言うところの"sān krommathan"のきわめて貴重な実例である。第8篇は書簡文の例。私人間の取引きに関するもの1通、大臣が地方官に宛てて発する公文書(sāntrā)が1通、計2点が収録されている。第9篇は法律文の例で、上述した「奴隷法」の1条と、同じく『三印法典』中の「盗賊法」の1条が引用されている。第10篇は歴史書の文例で、『アユタヤ年代記』から、女傑スリヨータイ戦死の条、第11篇には『ヴェーサントラ本生』の1節が紹介されている。そして最後の第12篇には、パーリ語で始まる僧侶の説法の例がひかれている。

第19章の散文例に勝るともおとらない史料的価値をもつのは、第20章の会話編(Dialogi teu colloquia inter varias personas)である。ここでは、「学殖豊かな一僧侶」の筆になるというつぎの16篇の会話例が収録されている。すなわち、(1)「子供同志」、(2)「大人と子供」、(3)「自由民と役人」、(4)「王族と奴隷」、(5)「大臣と家来」、(6)「自由民と王族」、(7)「国王と近習」、(8)「王妃と侍女」、(9)「役人と国王」、(10)「国王と高僧」、(11)「僧侶と在家」、(12)「在家と僧侶」、(13)「婦人と僧侶」、(14)「女の物売り同志」、(15)「上流婦人同志」、(16)「医者と病人」。

これらの会話例から、われわれは19世紀中葉当時における対話者の身分的差異と、その差異を示す微妙な表現法を学ぶことができる。

第21章は時間、度量衡、祝日、幣制ととこれに関する言語表現を取扱った章で、歴史史料を読む者にとって恰好の手引である。全章は11節より構成される。第1節は「紀年法」で、当時使用されていたふたつの紀年、「仏暦」と「小暦」が紹介される。Pallegoixによれば、前者は「宗教暦」(aera religiosa)であって、もっぱら宗教に関してのみ用いられる。仏滅の日(陰暦6月白分15日)より起算し、西暦との差は543年である。後者は「政治暦」(aera politica)と呼ばれ、世俗的的目的のために用いられる紀年法で、西暦638年を元年とする。Pallegoixは「小暦」をサワンカロークの王プラルアンが採用した紀年法であるとしている。

第2節は暦法の解説である。1年は29日ないし30日をもって1カ月とする12の太陰月よりなる。月のずれは、3年に1度8月を2度繰返す閏月を挿入することによって修正する。12年(=12支)で一巡する *cyclus minor* と、第1旬(*ēkasok*)に始まり完成旬

(samritthisok) すなわち第 10 句に終る 10 句を 12 支と組合せてつくる 60 年をもって 1 巡とする *cyculus major* とがある。シャムでは「日」ではなく「夜」を単位として日を数えらるゝとする。

第 3 節では "Songkrān" と呼ばれる「新年」以下 17 の祝日について逐一解説されているが、この中には現在すでに廃止されている祝日も少なくなく、当時の状況を伝える資料として貴重である。

第 4 節の季節の説明では、インドと同様に (*sicut Indi*) 「暑季」, 「雨季」, 「冷季」の 3 季があるが、「乾季」と「雨季」の 2 季とすることもあり、むしろこの方がシャムの気候に合致しているという。

第 5 節では「週」と「時間」が取上げられる。まず、シャムには一般に「週」(*hebdomada*) を単位とする計算は行なわれないが、ヨーロッパと同様に、日曜から土曜まで、惑星の名称をもった 7 つの曜日があることを紹介する。時間については、現在では用いられていない 6 分をひとつの単位とする "bāt" という単位に言及している。この語は年代記の記述の中に散見されるが、当時はまだ用いられていたのであろうか。

第 6 節には、伝統的な月日の、記号による表示法が詳しく解説されていて、歴史研究者にとって有益である。

第 7 節は方角で、8 つの方角のおのおのについて、パーリ語式とタイ語式(例: 東北 "īsan" / "tawan ōk chieng nua") の呼称があげられている。

第 8 節の幣制の説明で注目されるのは、通貨は銀で金貨は実在するが流通はしていないこと、最低の流通単位は子安貝を意味する "bia" ではなく、1,000 ビアないし 1,200 ビアに相当する "füang" であるという指摘である。アユタヤ時代には 1 フアングは 800 ビアであり、この換算率は後世まで変更されていないはずであるのに、Pallegoix が 1 フアングを「通常は 1,000 ビア、時に 1,200 ビア」(*ordinarie mille bia et aliquando mille ducentae aequivalent uni fuang*) としているのは何故であろうか。在シャム 20 年の著者が、かかる日常的知識に不案内とは考えにくいとすれば当時すでに bia の観念があいまいになっていたことの証左を考えるべきかも知れない。

第 9 節では重量の単位が、また第 10 節では長さの単位が、第 11 節では容積の単位について、それぞれ解説が加えられている。

第 22 章は「タイ語韻律論」で、タイ語は同義語の反覆による音楽的な詩型をきわめて好むと述べ、"chan", "klṅn", "khlōng" 等、代表的な詩型の特長を略説したのち、それぞれの形式を代表する作品を紹介している。

第 23 章は「正書法」について論じている。タイ人の中に「正書法」の観念が確立するようになるのは、官撰の辞典編さんが開始された比較的近年のことに属する。<sup>⑪</sup> Pallegoix は、宮廷書記が筆写した書物以外に、綴字の正確な書き物はきわめてわずかしかないと述べ、タイ人は誰しもが長年寺院生活を送り、ここで読み書きを習っているにもかかわらず、「正しく書く術の心得ある者がほとんど見出せない」(...valdè pauci inter illos reperiuntur qui sciant artem rectè scribenendi.) 事実を指摘し(p.130) これに続けて、「それゆえタイ語の正書法は決して容易ではなく、まだ万人に受入れられるにはいたっていないと結論できよう」(undè concludi potest orthographiam linguae Thāi non adèdè facilem neque omnibus perviam esse.) と結んでいるが、これは今日われわれが 19 世紀前半の文書に接して得る印象と合致する。



第24章の Sapphanam は、直訳すれば「あらゆる名詞」(omnia nomina)となるが、これは Chindāmanī の冒頭におかれた記憶用の同音異語、ないし類音異義語のリストを指している。伝統的な方法でタイ語を学んだ者は、まずこの表の暗誦を命じられたのである。その大半はパーリ語、サンスクリット語からの借用語であるため、原語の発音は別々でも、タイ語ではまったくの同音となる場合が多い。(例えば "pāta", "pātra", "pāda" はいずれも "bāt" となる等) Pallegoix は Chinadāmanī の該当部分をそのまま転載し、各語にラテン訳を加えている。

第25章の Rāxasab とは、サンスクリット語 "rajā" + "śabda" のタイ訛音で「王室(宮廷)用語」(lingua regia, lingua palatii)の意味であるが、ここではひろくサンスクリット、パーリ、カンボジア語、マレー語に由来する文章語一切を含めて解説している。ここでは時にタイ語のテキストをなんらの説明を加えることなくそのまま収録しているなど、一見してなにか底本があることが明白であるが、典拠についてはまったく言及されていない。

第26章はシャムの歴史である。Pallegoix によれば、シャムの年代記(Phongsāwadān と呼ばれる)は、2部に分れているという。第1部は Phongsāwadān Nūa (北国年代記)と題され、太古よりアユタヤ建設までの歴史が物語られる。この書物は、1807年、当時副王の位にあったのちのラーマ2世王が、学術局右部(Krom Rāṭchabandit Khwā)の長であった Phra Wichienpricha に命じて編さんさせた年代記で、仏暦300年すなわち前243年に、2人の隠者が Satchanālai, Sawankhalōk 両国を建設したという伝説に始まり、1350年の Ūthōng 候によるアユタヤ建国までを取扱っている。本書に収録されたラテン語による要約は、この年代記のヨーロッパ語での最初の紹介と考えられる。

第2部は、1350年以降現在(=1834年)までを取扱っている。Description によれば、40巻本であるという。<sup>12)</sup> 記述の形式は、1907年に発見された Luang Prasoet 本<sup>13)</sup>や、1850年に Paramanuchitchinōrot 親王が編さんした「アユタヤ年代記抄本」<sup>14)</sup>に似て、きわめて簡潔な記述であるが、その内容は上記のいずれとも部分的にしか一致せず、その底本については今後の検討にまたなければならない。後述する「タイ語典籍目録」の中には、Sayāmrāt Phongsāwadān という書名が Annales regii regni Siam という訳名を付して掲げられているが、おそらくこれが底本であろう。

第27章は当時のシャム王国内の主要な国名の目録で、19世紀中葉の地理研究に重要な材料を提供している。全土は、中央部、北方、東方、西方、南方の5地方に分けられる。中央部は9国を含み、Nakhōnsawan をその北限とする。首都には Bāng Kōk, Thanabūrī, Krung Thēp Mahānakhōn Sī Ayutthayā という3つの呼称がある。Bāng Kōk は Bāng Makōk の縮少形で、この町のもとの名(nomen primitivum)であるが、「今日でも一般に用いられている」(quod hodiè etiām vulgò usurpatur)とある。もしこの "vulgò" が、「外国人の間で一般に」を意味せずシャム人もまたこの語を用いていたとするのであれば、新事実として注目される。北方の諸国には、Sukhōthai, Phitsanulōk など、いわゆる〈北方諸国〉(müang nūa)のほか、Chieng Mai, Phrae, Nan, Chieng Rai, Chieng Saen, Luang Phrabang, Muang Phuan などのラオ諸国(caput principatus Lao)等計23が含まれている。東方の諸国は、Wieng Chan (Vientiane) を北限とする東北タイの諸国のほか、Muang Kabin, Nakhōn Nāyok, Chachoengsao, Lopburi, Saraburi や、カンボジアの Battambang,

Siamréap, Kompot など 24 国を数えている。西方諸国は Singburi, Suphanburi, Kanchanaburi, Rātburi, Phetchaburi, Mahāchai, Samut Songkhram などの 9 カ国, 南方諸国には, タイ湾沿岸諸国と, マレー半島の Nakhōnsi Thammarāt, Songkhla, Phūket, Tānī (Pattani), Mūang Sai (Kedah), Trengganu 22 カ国 が含まれている。

第 28 章は「タイ語典籍目録」で, 主要なタイ語文献の表題 145 点が収録されている。現在 19 世紀中葉に存在したタイ語文献を, これほど網羅的に集めたものは外に求められない。主な文献名のみを分野別に紹介しておく。

(1) 歴史

*Phongsāwadān Mūang Nūa* (Annales regnorum septentrionis)  
*Sayāmrāt Phongsāwadān* (Annales regii regni Siam)  
*Nirāt Narin In* (Bellum cum civitate Marit (Mergui))

(2) 法律

*Monthienban* (Leges palatii)  
*Kotmāi Laksana tangtang* (Legum varii codices)  
*Krommasak* (De variis grandibus dignitatibus)  
*Phratammanūn* (Quidam codex legum)  
*Phraaiyakān* (Quidam codex legum)

(3) 暦法・占星術

*Sāram* (De eclipsi solis et lunae)  
*Pranēnthin* (Calendarium)  
*Chanthasuriyakhathīpanī* (De cursu solis et lunae)  
*Svriyā* (De itinere solis per circulum)  
*Māsawinitchai* (Explicatio phasis lunae)

(4) 文法

*Chindamanī* (Opus grammaticum)  
*Pathomkōkā* (Alphabetum)

(5) 文学

*Aphaimani* (Filius regis vitam heremiticam amplectitur in sylvis)  
*Inao* (Ex annalibus malayensium)  
*Rāmakien* (Vir unus cum gigante contendunt de uxore)  
*Hōysāng* (Filius regis natus in concha Sāng)  
*Sāmkok* (Ex annalibus Sinensibus)  
*Rāchāthirāt* (Annales regni Pegu)  
*Khunchāng Khunphaen* (Historia duorum militum circa uxorem disputantium)  
*Yuan Phai* (De Annamitis inferioribus erga Siamenses)  
*Phra Lō* (Historia regis Lo euntis ad quaerendam uxorem)

(6) 医薬

*Tamrā Yā tangtang* (Variae formulae medicamentorum)  
*Sapphakhun* (Virtutes substantiarum medicinalium)  
*Pathomchindā* (De moribus infantium)

*Phromparōhit* (De natura venti morbifici ejus que remedio)  
*Chawādān* (Remedia contra ventos morbificos)

(7) 仏教

*Traiphūmiwinitchai* (Descriptio trium mundorum)  
*Mahāchāt* (Magna generatio Buddhae)  
*Thotsachāt* (Decem sacrae generationes P. Khôdôm)  
*Mālai* (Malai sanctus talapuinus vadit ad liberandum damnatos in inferis)  
*Subin* (Subin liberat matrem suam ab inferis)  
*Mahāwong* (Annales insulae Ceylon)  
*Anākhottawong* (De Buddha venturo)

(8) 雑

*Phichaisongkhrām* (De modo obtinendi victoriam in bello)  
*Dutsadī Sangwoei* (De diversis speciebus elephantum)  
*Sawatdiraksā* (Ars prosperē se habendi)  
*Pisātpakaranam* (De geniis maleficis nomine Pisāt)  
*Chawāng Nikon Phyhon* (Arithmetica)

第 29 章は「仏教関係典籍目録」である。Pallegoix によれば、仏教関係の聖典は、Phra Trai Pidok と呼ばれ、Phra Winai (律)、Phra Sūt (經)、Phra Baramat (論) の三部に分れる。言うまでもなく Phra Trai Pidok とは『三藏經』(Tipiṭaka) を指すが、「論藏」に Abhidharma に由来する Phra Aphitham ではなく Phra Baramat が使われているのは何故であろうか。タイの仏教聖典は、全部で 3683 巻あり、その内容は、

Phra Winai Pidok	53 点	518 巻
Phra Sūt	215 点	1946 巻
Phra Baramat Pidok	90 点	787 巻
Phra Satthā Wisēt	62 点	430 巻
計	420 点	3683 巻

であるという。<sup>⑮</sup>

この章には、実に 24 ページにわたってこれら 420 点の典籍名がタイ語のまま掲げられており、当時の仏教を研究するための基本的資料として貴重であるが、著者はこれらの題名を翻訳することは、いたずらに意義不通の抽象名詞を羅列するだけなので無益であると述べ、一切説明を加えていない。

第 30 章はシャム仏教文書を、Trai Phūm というタイ語の書物にしたがって祖述したものであるが、Description の第 15 章 "Analyse du système Buddhiste, tirée des livres sacrés de Siam" (tome I: 416-478) にこのフランス語訳(全訳)が得られるので、ここでは説明を省略したい。たゞ Trai Phūm なる書物について一言説明を加えておくと、Pallegoix がこれを「アヌタヤ王の命により仏暦 2345 年に書かれた」(jussu regis Juthiae compositus fuit anno phra: Khôdôm 2345...) としているのは正しくない。仏暦 2345 年は西暦 1802/3 にあたるが、この時はアヌタヤはすでに滅び、現ラタナコーシン朝の治世となっている。これは、ラーマ 1 世王 (1782~1809) の命をうけた Phraya Thamma Pricha が当時存在していた Trai Phūm のテキストを

底本として、Trai Phūm Winicchai という書物を書いた事実を指すのではあるまいか。Trai Phūm の Urtext が書かれたのは 1343 年で、著者は、Sīsatchanālai-Sukhō-thai の王 Phayā Lithai であるというのが現在の定説となっている。現存する最古の写本は 1778 年、Maha Choei という名の僧によって筆写されたもので、題名は Trai Phūm Kathā あるいは Trai Phūm Phra Ruang と呼ばれている。おそらくこれが Phraya Thamma Pricha の Trai Phum Winicchai の底本となったのであろう。先年物故したタイの民俗学者 Phraya Anuman Rajadhon (Sathien Koset) は、"Trai Phūm をシャム人の仏教観の根原と呼び、この本の知識なしにシャム文学を語ることは、キリスト教とギリシャ・ローマ神話を知らずして英文学を語るにひとしいと述べている。<sup>⑬</sup> Pallegoix と同時代を生きたモンクット親王が、仏教改革運動を起したとき、真先に放棄すべき書の筆頭に Trai Phūm をあげたのは、かえてこの書物がシャム人の心に深い影響を与え続けて来た事実を示しているといえよう。<sup>⑭</sup> タイの民衆仏教研究者が、1 度はひもとくべき書物である。

註.

(1) Constance M. Wilson, "State and society in the reign of Mongkut, 1851-1868: Thailand on the eve of modernization" (Ph.D. thesis, Cornell University: 1970) が最も詳しい。このほか Abbot Low Moffat, Mongkut, the King of Siam. Ithaca: Cornell Univ. Press, 1961 などがある。

(2) Capt. James Low, A grammar of the Thai, or Siamese language. Calcutta, 1828.

(3) Pallegoix, Description..., tome second. 228-294.

(4) Sir John Bowring, The kingdom and people of Siam, vol. 1. London: John W. Parker & Son, 1857. vii-viii.

(5) Rev. J. Taylor Jones, "Notice of the new siamese grammar of Bishop Pallegoix," in Journal of the Indian Archipelago, V, 1851. 74.

(6) 荻原雲来編『漢訳対照梵和大辞典』(鈴木学術財団, 1974), 474.

(7) Ki Yuphi, "Banthūk rūang nangsū cindāmanī," in Thailand Fine Arts Dept., Cindāmanī lem 1-2 lae banthūk rūang nangsū cindāmanī. Bangkok, 1959. 133.

(8) Nathan Brown, "Comparison of the Indo-Chinese languages," in Journal of Asiatic Society of Bengal. 6, 1837. 1023-38.

(9) Alexander de Rhodes, Dictionarum Annamiticum Lusitarum et Latinum ope Sacrae Congregationis de propaganda fide in lucem editum ab Alexandro de Rhodes e Societate Iesu, eiusdemque Sacrae Congregationis Missionario Apostolico. Romae, 1651. De Rhodes がベトナム語 (Lingua Annamitica seu Tunchinensis) の声調を記述するにあたって用いた用語はつぎのとおり: tonus aequalis, tonus acutus, tonus gravis, tonus circumflexus, tonus ponderosus seu onerosus, tonus lenis.

(pp. 9~10)

(10) 『三印法典』については、拙稿「三印法典について」『東南アジア研究』第6巻4号(1969年3月) 155~178 参照。

(11) 王立アカデミー版の辞典が正書法の典拠として出版されたのは仏暦 2493年(1950)のことである。

(12) Description, tome second. 58.

(13) R. Frankfurter, "Events in Ayudhaya," in The Siam Society Fiftieth Anniversary Commemorative Publication. vol.1. Bangkok, 1954. 46-64.

(14) David, K. Wyatt, "The Abridged Royal Chronicle of Ayuthayā of Prince Paramānuchitchinorot," in Journal of the Siam Society, vol. 61, part 1 (January, 1973). 25-50; Jean Claude Brodbeck (tr.), Kromphra Paramanuchit Petite Chronique d' Ayutthaya, ancien royaume de Siam (1350-1767). Bangkok: Chalermnit, 1974.

(15) 数字の誤りはテキストのまま

(16) Sathien Koset, Lao rūang nai traiphūm. Bangkok, 1966.

(17) Trai Phūm については、C. Coedès et C. Archambault, Les Trois Mondes (Traibhūmi Braḥ R'vañ). Paris: École Française d'Extrême-Orient, 1973 および P. Schweisguth, Étude sur la littérature siamoise. Paris: Imprimerie Nationale, 1951. 36-40 参照。